

43.3%であり、がん予防に対する意識が高い集団ですら継続的な検診受診を促すための対策が必要であることが確認された。

同時に行なわれたアンケートでは「頸がん検診受診率向上に必要なこと」として費用補助制度（81.4%）に続き「受診できる医療機関の情報」（56.9%）、「検診のための休暇」（44.7%）などの回答が多くあり（表 2）、医療従事者ですら検診へのアクセスに苦慮している様子が見受けられ、受診への利便性を提供する事が検診率向上への方策であると考えられた。

### 3. 横浜市立市民病院における土曜日の頸がん検診実施の効果

横浜市立市民病院がん検診センターでは月曜日～金曜日に各種がん検診を行なっているが、就労女性や育児中の女性が受診しやすいよう、2005年11月から月1回の土曜検診を実施している。

2010年度の子宮がん検診受診者は2,869名で、平日受診者2,733名、土曜日受診者136名であった。受診者の年代別割合を表3に示す。20～49歳の割合は受診者全体では30.3%であったのに対し、土曜日では66.9%と高率であった。20～29歳の受診者比率は平日2.7%/土曜日8.1%、30～39歳では7.6%/18.4%、40～49歳では18.0%/40.4%と各年代で土曜日受診者の割合が著しく多かった（図5）。検診回数別の検討では、初回検診者の割合が平日では39.7%、土曜日では73.5%と土曜日では初回検診者が多かった（表4）。

ASC-US以上の細胞診陽性率は受診者全体の1.1%であったが、平日受診者で1.1%、土曜日受診者で2.2%であった。ま

た、初回受診者では2.1%であったのに対し、2回目以上の検診者では0.4%であった（表5）。年代別の陽性率は20～29歳4.7%、30～39歳3.4%、40～49歳1.6%の順に多かった（表6）。

### D. 考察

本邦における若年者の子宮頸がん罹患率・死亡率の増加に歯止めをかけるためには、HPVワクチンの高い接種率と検診受診率の改善が不可欠である。現在の横浜市のHPVワクチン公費助成による接種については、2011年12月までの対象者の接種率約7割という数字より、2011年度末には一定の目標を達成できる可能性が示唆された。この要因は、個別勧奨・チラシ・ホームページ等による告知が、対象年齢の中学生・高校生とその保護者に効果的であったと考えられる。横浜市ワクチン接種緊急促進事業のチラシでは、子宮頸がん予防ワクチンについての欄に「20歳を過ぎたら定期的に子宮がん検診も受けましょう」と、がん検診の大切さについても触れていることで、ワクチン接種した女子学生が成人となった際の頸がん検診受診行動に結びつく可能性が期待される。横浜市立大学附属病院「子宮頸がん予防外来」における、公費助成対象年齢をはずれた年代の女性へのHPVワクチン任意接種者の調査からも、ワクチン接種が子宮頸がん検診未受診者や不定期受診者の検診受診行動に繋がる可能性が示されている。一方で、現在の子宮頸がん受診率の低迷からの脱却し、国の目標である受診率50%を横浜市全体で早期に達成するには、さらなる効果的啓発や告知の方法の検討や、検診を受けやすい

環境（費用補助・休日診療・アメニティーなど）の構築が重要であると考えられた。その中で、横浜市立市民病院におけるデータでは、土曜検診においては20～49歳の若年層受診者の割合が多く、また、初回受診者の割合も多かったことから、土曜検診が若年女性の頸がん検診受診の糸口となっていると考えられる。若年女性の検診受診率向上のためには子宮頸がん検診可能施設・検診可能日などのPRが低コストで効果を上げられる可能性がある。

## E. 結論

今回のわれわれの研究から、今後の横浜市における子宮頸がんの総合的予防対策強化のためには、対象者へのコミュニティー単位での継続的な啓発に加え、受診への動機付けや受診しやすいシステム構築が必要不可欠であることも明らかになった。

## F. 健康危険情報

なし

## G. 研究発表

### 1. 論文発表

なし

### 2. 学会発表

第63回日本産科婦人科学会学術講演会  
「HPVワクチン接種希望の病院関係者における子宮頸がん予防に関する意識調査」佐藤美紀子，元木葉子，助川明子，北山玲子，持丸綾，丸山康世，沼崎令子，杉浦賢，宮城悦子，平原史樹 2011年8月，大阪

第50回日本臨床細胞学会秋期大会  
シンポジウム「明日に生きる女性のためのセッション2，細胞診従事者に知ってほしい子宮頸がん撲滅ムーブメント：「横浜市立大学における医療従事者対象子宮頸がん予防外来から見える事」，佐藤美紀子，2011年10月，東京

## H. 知的財産権の出願・登録状況

なし

横浜市からのお知らせ: 高校生用

## 麻しん風しん予防接種を受けましたか？

**対象: 高校3年生相当(平成5年4月2日～6年4月1日生まれ)の方**  
(平成23年度に限り、高校2年生相当の方も接種できます。詳しくは下の(★1)もご覧ください。)

麻しん風しんの定期予防接種は、乳幼児期に1回接種のみの接種でしたが、平成18年4月の改正により、**2回接種**となりました。麻しんは感染力が非常に強く、かかった場合は対症療法しかありません。予防にはワクチン接種が非常に有効ですので、**次の生年月日の方はこの機会に予防接種を受けましょう。**(次の生年月日以外の方が接種を受ける場合、実費負担となります。)

対象となる方の生年月日	無料で受けられる期間
平成5年4月2日～平成6年4月1日(★1)	平成23年4月1日～平成24年3月31日 (この期間を過ぎると有料です)

- (★1) **高校2年生相当(平成6年4月2日～平成7年4月1日生まれ)の方**については、平成24年度に接種対象となりますが、平成24年3月31日までの間、修学旅行や海外旅行等で接種をご希望される方については、区役所で手続きしていただければ、特例により無料で接種を受けることができます(23年度限りの特別措置です)。ただし、その場合、「**高校3年生相当(平成24年度中)の期間に、再度、接種をすることはできません。**」

【実施場所】 横浜市内の協力医療機関で接種してください。

※協力医療機関については、健康福祉局ホームページをご覧くださいか、「横浜市ワクチン相談窓口」・「各区の健康づくり係」へおたずねください。

※接種日時については、事前に協力医療機関にお問い合わせください。

【接種にあたってのご注意】

- ・無料で接種を受ける際には『**予診票(接種券)**』が必要です。

対象となる方には、平成23年3月下旬(または平成23年5月下旬)に、ご自宅へ『接種のご案内』および『予診票(接種券)』を送付しています。通知が届いていない場合は、横浜市ワクチン相談窓口にご連絡ください。

※「平成23年4月1日以降に横浜市外から転入された方」や「紛失等」の場合

- 対象となる方のお名前が記載された「母子健康手帳」と「住所・年齢が確認できるもの(保険証等)」をご持参のうえ、お住まいの区の区役所健康づくり係で、『予診票(接種券)』を入手していただきますようお願いいたします。

- ・**接種間隔**について

麻しん風しん予防接種を接種後、異なる予防接種を受ける場合には、27日以上の間隔をおくことが必要です。9月中にはじめて子宮頸がん予防ワクチンを受けようとする高校2年生相当の女子の方は、特に御注意ください(下の子宮頸がん予防ワクチンについての説明もよくお読みください)。

## 子宮頸がん予防ワクチンを無料で受けられることを知っていますか？

**対象: 中学1年生～高校2年生相当の女子(平成6年4月2日～11年4月1日生まれ)**

横浜市では、中学1年生～高校2年生相当(平成6年4月2日生まれ～平成11年4月1日生まれ)の女子を対象に、平成24年3月31日までの間、子宮頸がん予防ワクチンの無料接種事業を実施しています。

ワクチンは原則として6か月間に3回接種します。そのため、**3回とも無料で受けるためには、遅くとも9月中に接種を開始する必要があります。**(平成24年4月1日以降の接種は実費負担となり、1回あたり16,000円前後の費用がかかります。)

接種を希望される方は、お早めに市内協力医療機関でご予約ください。

(予診票は協力医療機関にあります。)

【このチラシについてのお問い合わせ先】

横浜市ワクチン相談窓口 (平日9:00～17:00 ※年末年始除く。)

電話: 045-671-4183 Fax: 045-664-7296

表1. 横浜市ワクチン接種緊急促進事業 接種状況 (2011.12.27現在)

年齢区分	対象者数(人)	集計内容	平成23年											合計	接種率
			2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月			
中1	16,691	被接種者数			75	50	70	825	1,995	6,471	1,343	461	11,290	67.6%	
		延べ接種回数			150	119	115	897	2,728	8,302	5,498	2,863	20,672		
中2	16,458	被接種者数	555	422	145	38	71	789	1,772	5,990	1,137	397	11,316	68.8%	
		延べ接種回数	555	841	467	165	113	882	2,790	8,061	5,021	2,709	21,604		
中3	15,954	被接種者数	614	422	124	42	68	779	1,825	5,597	1,043	353	10,867	68.1%	
		延べ接種回数	614	999	495	158	101	887	2,874	7,642	4,724	2,421	20,915		
高1	16,460	被接種者数	766	637	242	55	144	1,496	1,915	3,676	815	319	10,065	61.1%	
		延べ接種回数	766	1,246	959	245	250	1,677	3,731	5,877	3,480	1,817	20,048		
高2	15,562	被接種者数	4,473	2,947	316	89	549	1,176	1,087	1,500	336	124	12,597	80.9%	
		延べ接種回数	4,473	6,729	1,948	444	688	1,695	4,664	4,579	2,019	842	28,081		
計	81,125	被接種者数	6,408	4,428	902	274	902	5,065	8,594	23,234	4,674	1,654	56,135	69.2%	
		延べ接種回数	6,408	9,815	4,019	1,131	1,267	6,038	16,787	34,461	20,742	10,652	111,320		

注意: 本数値は協力医療機関からの報告に基づき作成したため、実際の被接種者数とは若干の誤差がある。

図1. 横浜市立大学医学部関係者を対象とした子宮頸がん予防に関する意識調査の概要

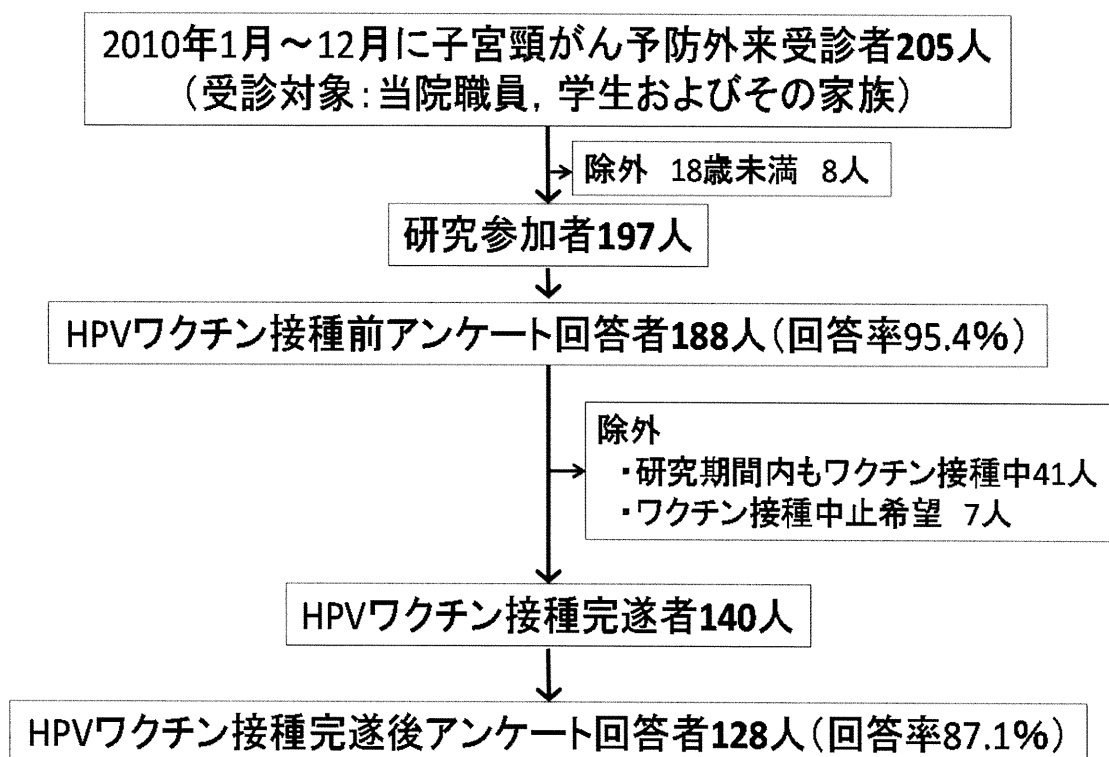
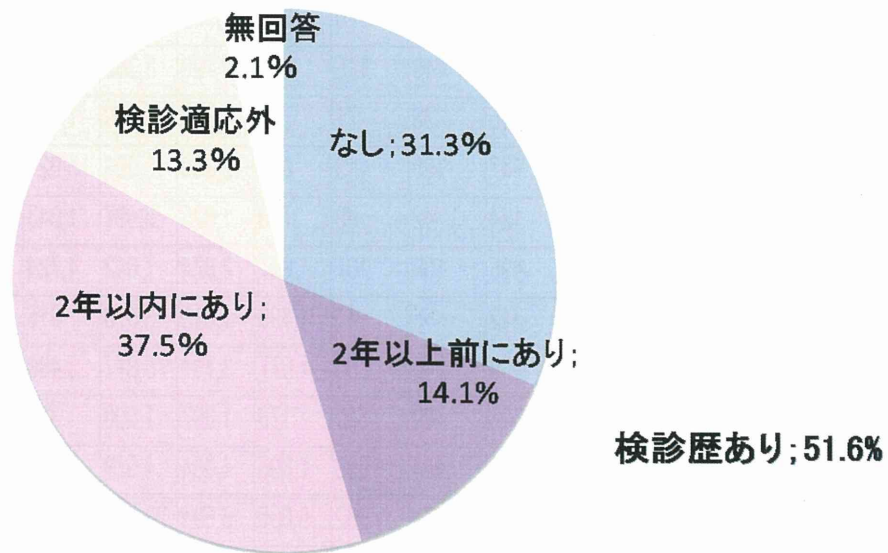


図2. 対象者の子宮頸がん検診受診状況  
(HPVワクチン接種前)N=128



一般集団に比較して検診受診率が高く、本研究の対象集団における子宮頸がん予防への関心の高さがうかがえる。

図3. 対象者の子宮頸がん検診受診状況  
(HPVワクチン接種終了時点)N=128

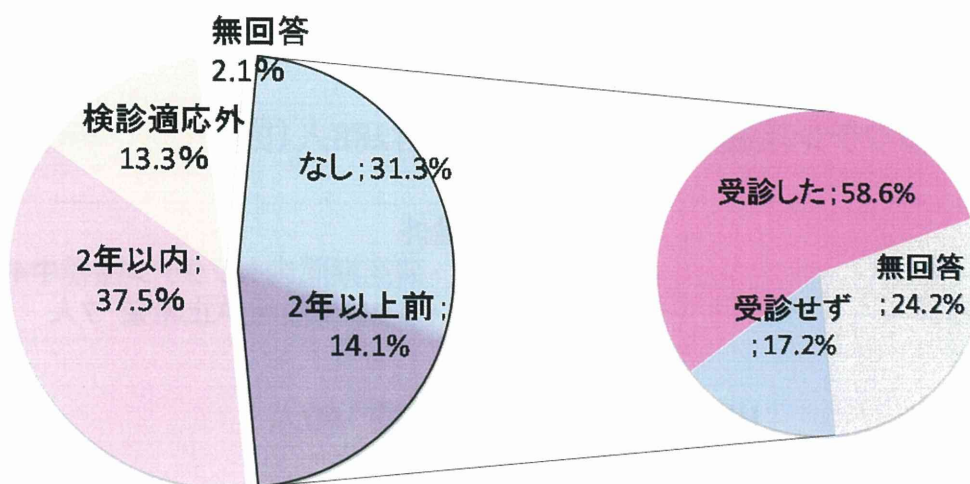


図4. HPVワクチン前後での子宮頸がん検診受診状況 (N=128)

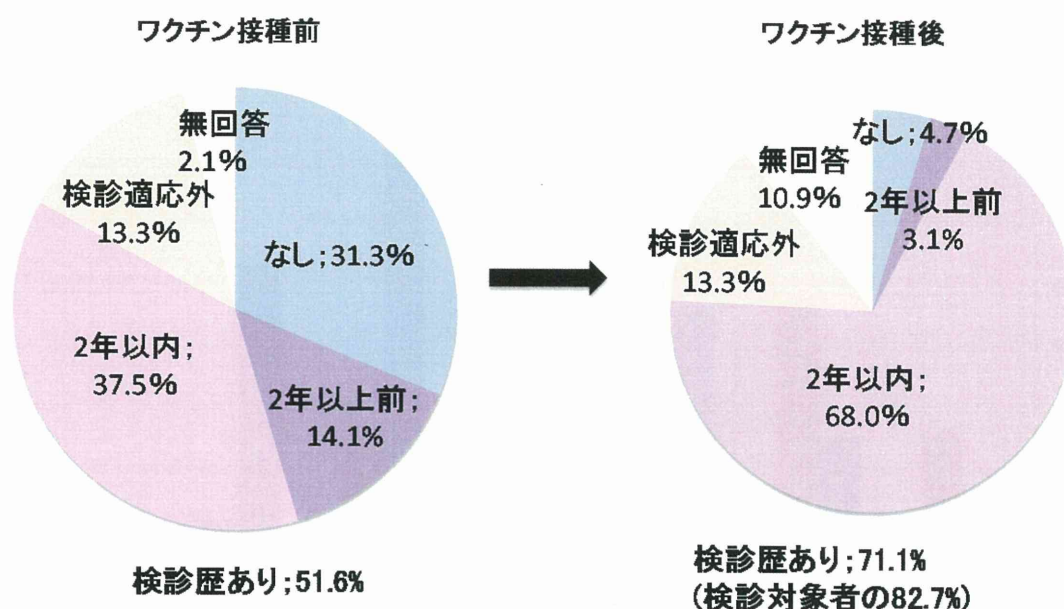


表2. 子宮頸がん検診受診率向上のために必要だと思われる対策 (ワクチン接種前アンケート N=188) 複数回答

費用補助制度	医療機関の情報	教育・啓発活動	検診のための休暇	女性産婦人科医師による検診
153 (81.4%)	107 (56.9%)	101 (53.7%)	84 (44.7%)	74 (39.4%)

表3 横浜市立市民病院における子宮頸がん検診受診者の年齢別割合

	受診者数	20~29歳	30~39歳	40~49歳	50~59歳	60~69歳	70~79歳	80歳~
平日	2733	74(2.7%)	209(7.6%)	493(18.0%)	497(18.2%)	834(30.5%)	586(21.4%)	40(1.5%)
土曜日	136	11(8.1%)	25(18.4%)	55(40.4%)	33(24.3%)	11(8.1%)	1(0.7%)	0
計	2869	85(3.0%)	234(8.2%)	548(19.1%)	530(18.5%)	845(29.4%)	587(20.4%)	40(1.4%)

Cochran-Armitage trend test,  $p < 0.0001$

図5. 検診受信者の年齢分布（平日/土曜日）

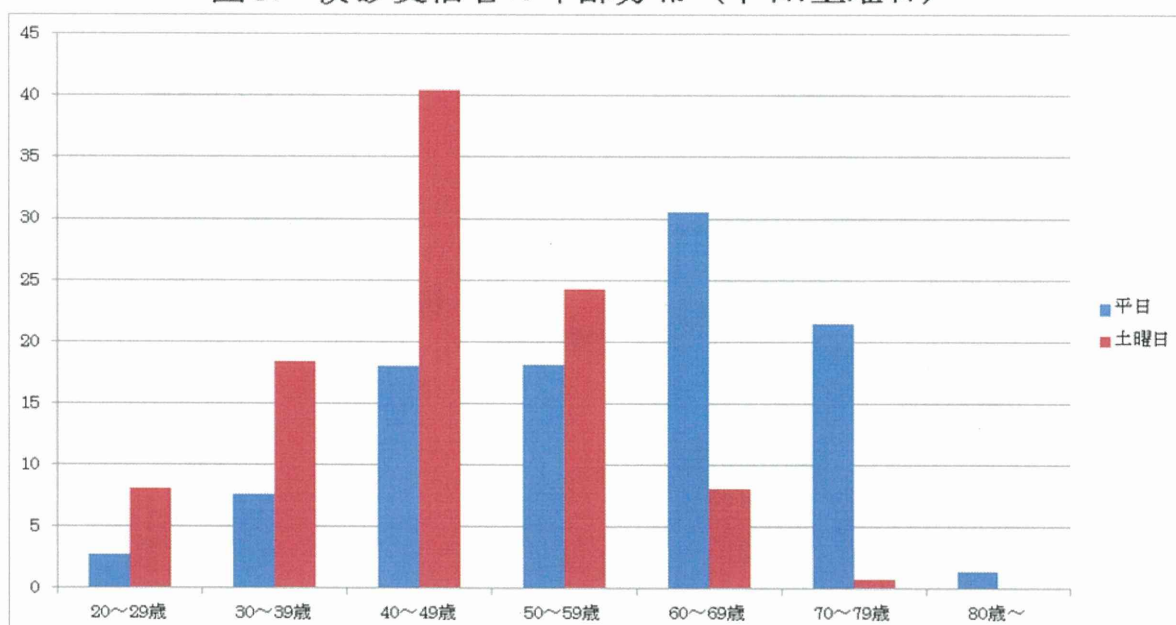


表4 横浜市立市民病院における子宮頸がん検診初回検診者の割合

	受診者数	検診回数別	
		初回検診	2回以上
平日	2733	1086(39.7%)	1647(60.3%)
土曜日	136	100(73.5%)	36(26.5%)
計	2869	1186(41.3%)	1683(58.7%)

chi-square test,  $p < 0.0001$

表5 横浜市立市民病院における  
子宮頸がん検診受診者の曜日別細胞診異常

	総数	初回	2回以上
平日	29(1.1%)	22(2.0%)	7(0.4%)
土曜	3(2.2%)	3(3.0%)	0(0.00%)
	32(1.1%)	25(2.1%)	7(0.4%)

chi-square test,  $p < 0.0001$

表6 横浜市立市民病院における子宮頸がん検診受診者の細胞診異常と年齢分布

細胞診異常	総数	20～29歳	30～39歳	40～49歳	50～59歳	60～69歳	70～79歳	80歳～
ASC-US	14	2	3	2	4	3	0	0
LSIL	8	2	3	1	1	1	0	0
HSIL	4	0	1	2	1	0	0	0
ASC-H	5	0	1	4	0	0	0	0
SCC	1	0	0	0	1	0	0	0
腺系	0	0	0	0	0	0	0	0
計	32	4	8	9	7	4	0	0
発見率(%)	1.1	4.7	3.4	1.6	1.3	0.5	0	0

Cochran-Armitage trend test,  $p < 0.0001$



## 女子大学生の子宮頸がん予防と行動に関する研究

— 定点モニタリングの開始時データ解析 —

研究分担者：大重 賢治 横浜国立大学 保健管理センター 教授  
研究協力者：坂梨 薫 横浜市立大学大学院医学研究科看護学専攻 教授  
助川 明子 横浜市立大学医学部産婦人科 客員研究員

### 研究要旨

子宮頸がん予防対策のための基礎資料を得るために、大学新入生と医学部3年生の女子学生を対象に無記名自己記入式アンケート調査を行った。新入生のHPVワクチン認知度は49.5%、接種率は5.4%、医学部3年生では認知度96.6%、接種率15.7%であった。子宮頸がん検診の認知度は高いものの、子宮頸がん検診の方法や公費助成についての知識は充分浸透していなかった。将来的にHPVワクチンや子宮頸がん検診を受けたいと考えている学生は多く、子宮頸がん予防の対象となる10代から20代の女性に対しての情報提供や受診のしやすい環境づくりなど社会医学的なアプローチが重要であると考えられた。

### A. 研究目的

子宮頸がん予防の中心的対象となる若年者が子宮頸がん予防に対しどのような知識や考え方を持つか、ワクチンの接種率はどの程度か、子宮頸がん検診受診率はどの程度かを調査し、子宮頸がん予防の促進因子をあきらかにすることで、今後の普及活動の基礎データとすることを目的とする。

### B. 研究方法

本年度は、2011年4月入学の横浜国立大学および横浜市立大学医学部の女子学生、2011年度において3年次生の横浜市立大学医学部女子学生を対象とした。

無記名自己記入式アンケート用紙（添付資料参照）を用いて、ヒトパピローマ

ウイルス（Human Papillomavirus, HPV）ワクチン接種歴、検診受診歴について調査を行った。また、子宮頸がん・HPVワクチン・子宮頸がん検診に関する質問を各10問設定し、子宮頸がん予防に関する知識を調査し、新入生と医学部3年生との間で、知識に違いがあるかどうかを比較検討した。なお、知識を問う設問としては不適切と判断された設問が、計30問中、3問あった。これらについては、各項で説明を加える。

本分担研究の期間は3年間としており、次年度、次々年度にも同様のアンケート調査を行い、時系列的な変化を追う予定である。

(倫理面への配慮)

プライバシーを保護するため、アンケートは無記名とした。また、調査対象者には、本研究の意義を説明した上で、回答したくない場合は回答しなくても良い旨を伝え、調査への協力を依頼した。回

### C. 研究結果

2011年新入生は、総数660名で、そのうち630名(医学部以外508名, 医学部看護科(以下看護科) 91名, 医学部医学科(以下医学科) 31名)がアンケートに回答し

収したアンケートおよび集計したデータは施設可能な研究室内にて保管を行っている。本研究は、横浜市立大学医学部倫理委員会および横浜国立大学疫学研究倫理委員会にて承認を受けて実施している。

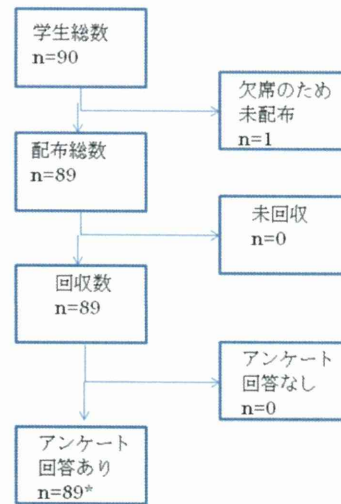
た(回答率95.5%) (図1)。2011年医学部3年生は、総数90名で、調査当日の欠席者1名を除く89名(看護科61名, 医学科28名)がアンケートに回答した(回答率98.9%) (図2)。

図1. 2011年新入生アンケート調査



\*医学部以外 (n=508), 医学部看護科 (n=91), 医学部医学科 (n=31)

図2. 2011年医学部3年生アンケート調査



\*医学部看護科 (n=61), 医学部医学科 (n=28)

#### 1. HPV ワクチンの認知度と接種率

調査時点でのHPVワクチンの認知度は、新入生では49.5% (312名) と約半数に留まったのに対し、医学部3年生では96.6% (86名) と高い割合を示した。実際にHPVワクチン接種を受けた学生の割合は、新入生で5.4% (34名), 医学部3年生で

15.7% (14名) と低い値であった(表1, 表2)。HPVワクチンの存在を知っていた学生に限っても、ワクチン接種率は、新入生で10.6%, 医学部3年生で15.1%と低い値に留まった(図3, 図4)。接種年齢の平均値は新入生で17.8歳(標準偏差0.77歳) 医学部3年生で19.9歳(標準偏差0.90

歳)であった。

今後、HPVワクチンを受けたいかとの設問に、新入生の81.6% (514名) , は受けたいと答えており、高い関心が示された。受けたくないと回答した新入生の受けたくない理由には、費用が高い (41名) , 副作用が心配 (44名) , 若いので必要な

い (28名) などが挙げられた (複数回答)。

一方、医学部3年生においてワクチン接種を受けたいと回答した学生は67.4% (60名) と新入生より低い割合を示した。受けたくない理由は、費用が高い (17名) , 副作用が心配 (4名) , 若いので必要ない (5名) であった (複数回答)。

表1. 2011年新入生

	人数	平均年齢±標準偏差 (最小値-最大値, 中央値)		HPVワクチン接種			子宮頸がん検診受診		
				あり	なし	無回答	あり	なし	無回答
全体	630	18.7±2.62 (18-46, 18)	人 %	34 5.4%	589 93.5%	7 1.1%	20 3.2%	604 95.9%	6 1.0%
国大	508	18.7±2.86 (18-46, 18)	人 %	29 6.7%	474 93.3%	5 1.0%	19 3.7%	484 95.3%	5 1.0%
市大看護科	91	18.7±0.84 (18-25, 18)	人 %	4 4.4%	85 93.4%	2 2.2%	1 1.1%	89 97.8%	1 1.1%
市大医学科	31	18.7±2.02 (18-29, 18)	人 %	1 3.2%	30 96.8%	0 0.0%	0 0.0%	31 100.0%	0 0.0%

表2. 2011年医学部3年生

	人数	年齢		HPVワクチン接種			子宮頸がん検診受診		
				あり	なし	無回答	あり	なし	無回答
全体	89	20.9±1.30 (20-30, 21)	人 %	14 15.7%	74 83.1%	1 1.1%	14 15.7%	73 82.0%	2 2.2%
市大看護科	61	20.7±0.60 (20-22, 21)	人 %	6 9.8%	54 88.5%	1 1.6%	9 14.8%	51 83.6%	1 1.6%
市大医学科	28	21.5±2.01 (20-30, 21)	人 %	8 28.6%	20 71.4%	0 0.0%	5 17.9%	22 78.6%	1 3.6%

図3. 新入生のHPVワクチンの認知率と接種率

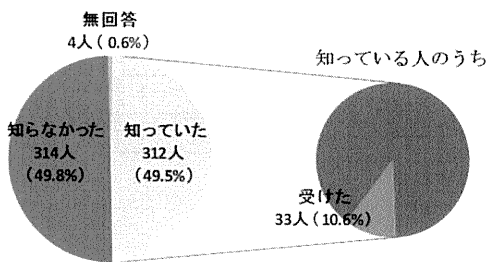
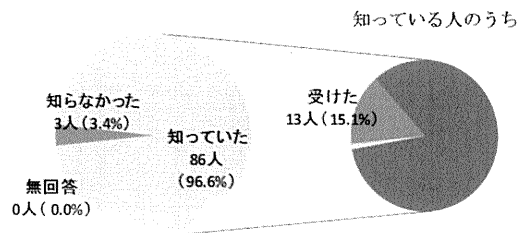


図4. 医学部3年生のHPVワクチンの認知率と接種率



## 2. 子宮頸がん検診の認知度と受診率

子宮頸がん検診の認知度は、新入生では78.9% (497名) , 医学部3年生では97.8% (87名) であった。子宮頸がん検診受診率は、新入生で3.2% (20名) , 医学部3年生で15.7% (14名) と低い割合であっ

た (表1, 表2) 。子宮頸がん検診を知っていると答えた学生に限っても、検診受診率は、新入生で3.6% , 医学部3年生で16.1%と低い値に留まった (図5, 図6) 。検診受診年齢は新入生で平均27.3歳 (標準偏差9.17歳) , 医学部3年生で平均19.9

歳（標準偏差0.90歳）であった。なお、検診受診年齢が新入生で高いのは、新入生の中に入学時すでに子宮頸がん検診の公費助成対象である20歳を超えている学生がおり、この学生たちの検診受診歴が結果に影響を与えていると考えられる。

今後、子宮頸がん検診を受けたいかとの設問に、新入生の90.5%（570名）は受けたいと答えており、高い関心が示された。受けたくないと回答した新入生の受

けたくない理由には、検査が怖い（25名）、時間がかかる（29名）、若いので必要ない（18名）などが挙げられた（複数回答）。医学部3年生では93.3%（83名）が受けたいと答えており、こちらも高い関心が示された。受けたくないと回答した医学部3年生の受けたくない理由は、検査が怖い（2名）、時間がかかる（2名）、若いので必要ない（1名）であった（複数回答）。

図5. 新入生の子宮頸がん検診の認知率と接種率

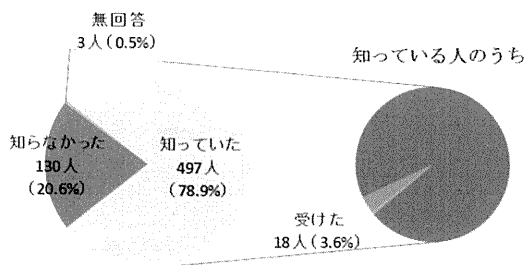
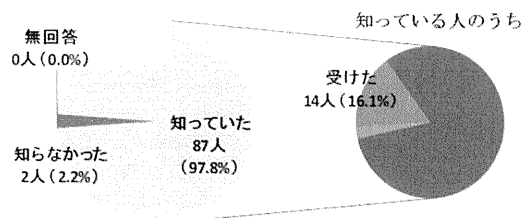


図6. 医学部3年生の子宮頸がん検診の認知率と接種率



### 3. 子宮頸がんに関する知識

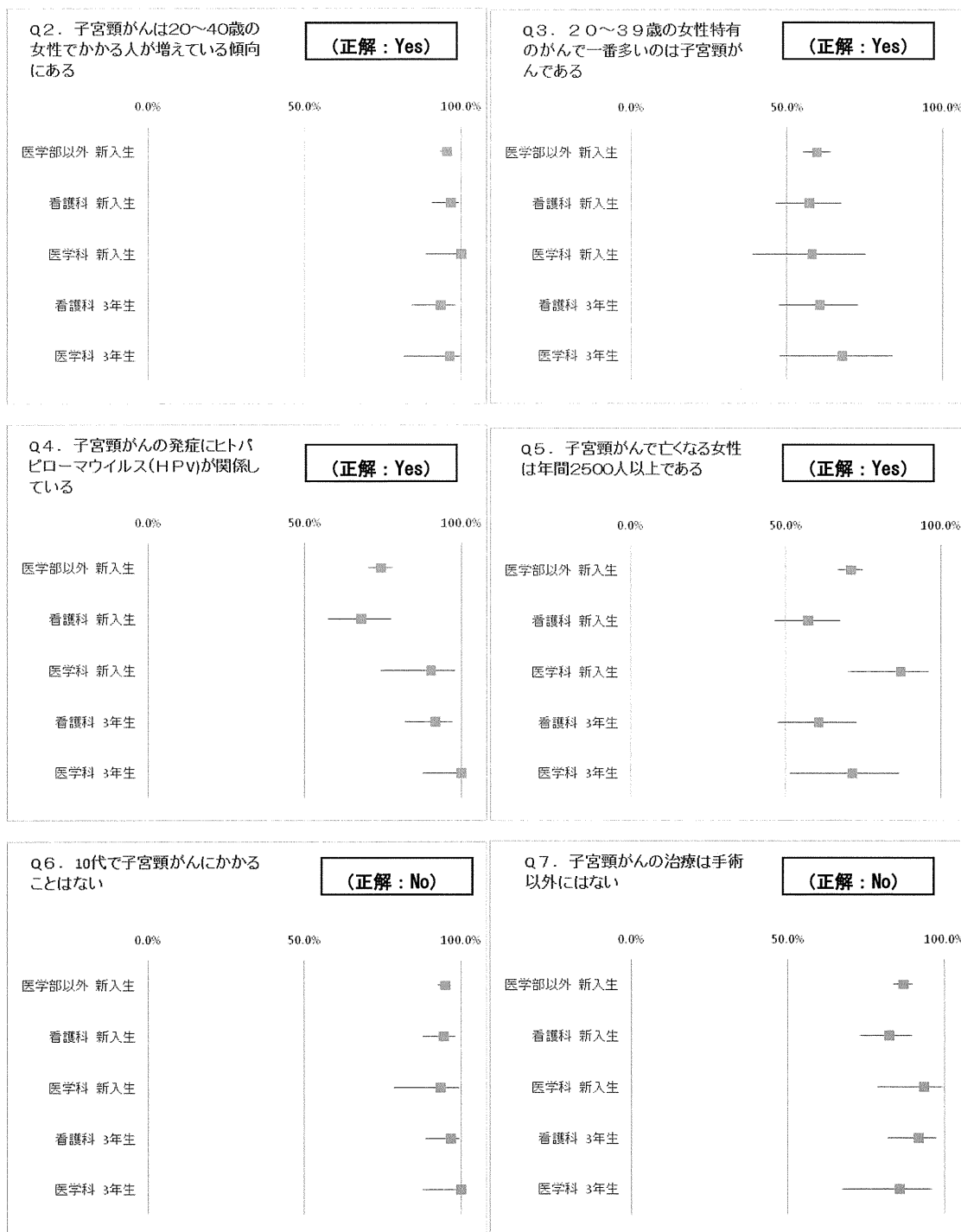
子宮頸がんに関する知識を問う設問10題（Q1～10）のうち、最初の質問（Q1）を除き医学部以外新入生、看護科新入生、医学科新入生、看護科3年生、医学科3年生の5群の正解率を図7に、新入生と医学部3年生の比較検討を表3に示す。なお、結果は正解率とその95%信頼区間で表わしている。

図7より、Q2「子宮頸がんは20～40歳の女性でかかる人が増えている傾向にある」、Q6「10代で子宮頸がんにかかることはない」、Q7「子宮頸がんの治療は手術以外にはない」の3問は、どの群でも高い正解率である。新入生と医学部3年生とを比較すると、Q4「子宮頸がんの発症にヒト

パピローマウイルス（HPV）が関係している」、Q8「子宮頸がんになるとその後は絶対妊娠することはできない」、Q9「性経験がHPV感染に関係している」の3問では、医学部3年生で正解率が高かった。Q10「HPVで起こるがんは子宮頸がんだけである」は新入生で正解率が高かった。

最初の質問（Q1）とした「子宮がんというのは、子宮頸がんのことである」は、正解を×として作成したが、のちの検討により「子宮がんというのは、子宮頸がんだけをさす」などとしなければ完全に×とできないとの議論となり、これを不適切問題とした。

図7 子宮頸がんに関する知識（正解率と95%信頼区間）



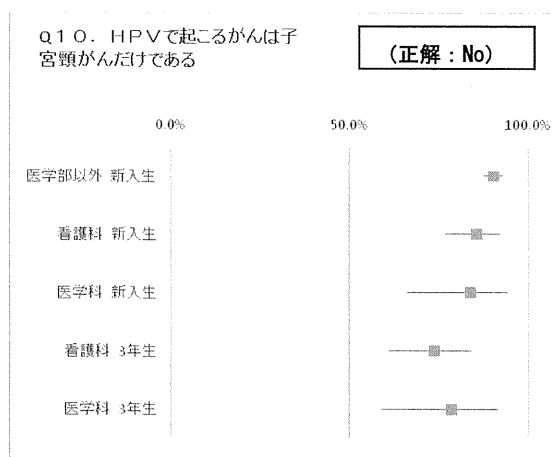
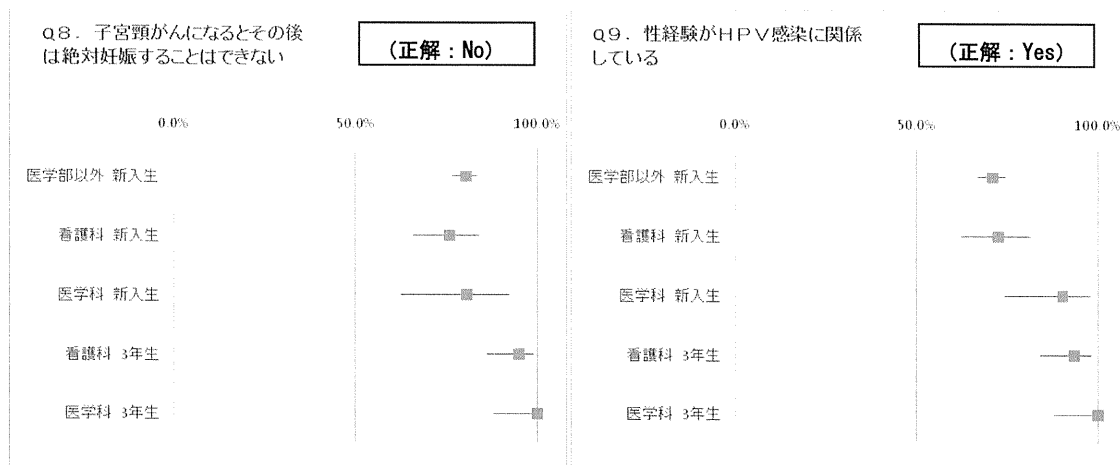


表3 子宮頸がんに関する知識 新入生と医学部3年生の比較検討

Q		正解率	95%信頼区間		有意差*
			下限値	上限値	
2	新入生	95.9%	94.0%	97.3%	なし
	医学部3年生	94.4%	87.4%	98.2%	
3	新入生	59.2%	55.3%	63.1%	なし
	医学部3年生	62.9%	52.0%	72.9%	
4	新入生	74.3%	70.7%	77.7%	あり
	医学部3年生	94.4%	87.4%	98.2%	
5	新入生	69.8%	66.1%	73.4%	なし
	医学部3年生	64.0%	53.2%	73.9%	
6	新入生	94.9%	92.9%	96.5%	なし
	医学部3年生	97.8%	92.1%	99.7%	
7	新入生	86.7%	83.8%	89.2%	なし
	医学部3年生	89.9%	81.7%	95.3%	
8	新入生	79.7%	76.3%	82.8%	あり
	医学部3年生	96.6%	90.5%	99.3%	
9	新入生	72.2%	68.5%	75.7%	あり
	医学部3年生	95.5%	88.9%	98.8%	
10	新入生	89.5%	86.9%	91.8%	あり (新入生高)
	医学部3年生	75.3%	65.0%	83.8%	

\*95%信頼区間が重ならない場合、統計学的に有意な差があると判定

#### 4. HPV ワクチンに関する知識

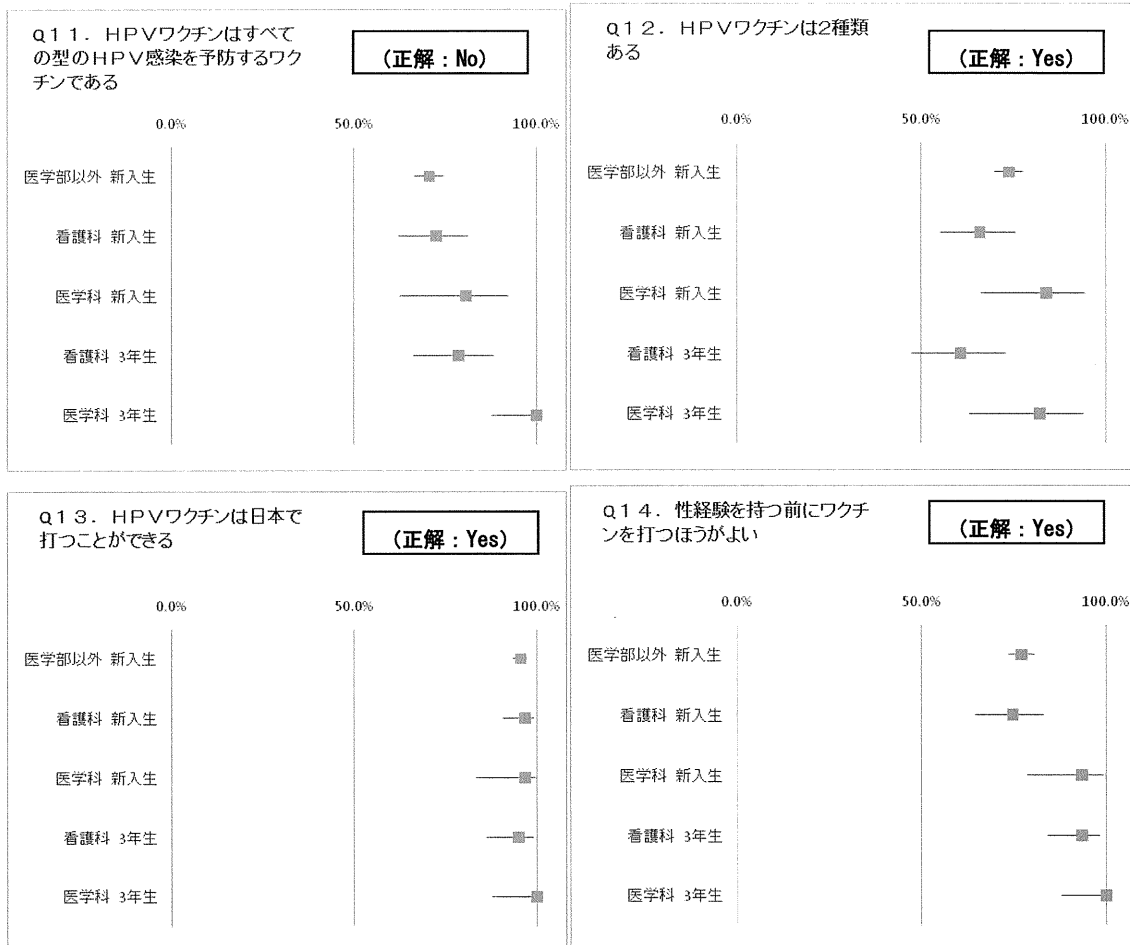
HPVワクチンに関する知識を問う設問10題(Q11~20)のうち、9番目の質問(Q19)を除き5群の正解率を図8に、新入生と医学部3年生の比較検討を表4に示す。

図8より、Q13「HPVワクチンは、日本で打つことができる」、Q15「HPVワクチンを受けていれば子宮頸がんにはかからない」、Q18「HPVワクチンさえ打ったら性行為で感染する病気の心配はない」の3問は、どの群でも正解率が高かった。新入生と医学部3年生を比較すると、Q11「HPVワクチンはすべての型のHPV感染を予防するワクチンである」、Q14「性経験を持つ前にワクチンを打つほうがよい」、Q17「HPVワクチンは3回の接種が必要だ」の3問は、医学部3年生で正解率が高かった。

9番目に質問としてあげたQ19「HPVワクチンの接種費用は1~2万円程度だ」は、3回接種総額(4~5万円)として正解を×として作成したが、1回の接種と解釈すれば○と考えられるため、これを不適切問題とした。

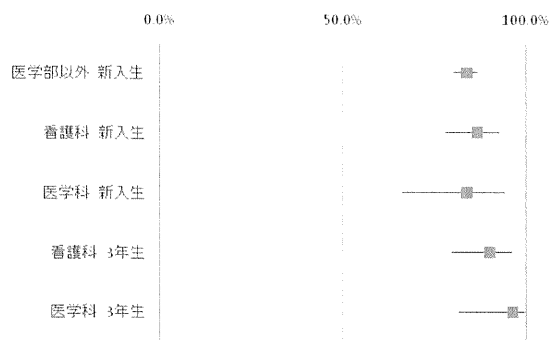
9番目に質問としてあげたQ19「HPVワクチンの接種費用は1~2万円程度だ」は、3回接種総額(4~5万円)として正解を×として作成したが、1回の接種と解釈すれば○と考えられるため、これを不適切問題とした。

図8 HPVワクチンに関する知識 (正解率と95%信頼区間)



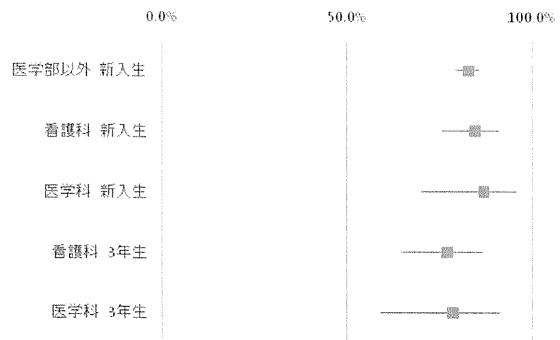
Q15. HPVワクチンを受けて  
いれば子宮頸がんにはかからない

(正解: No)



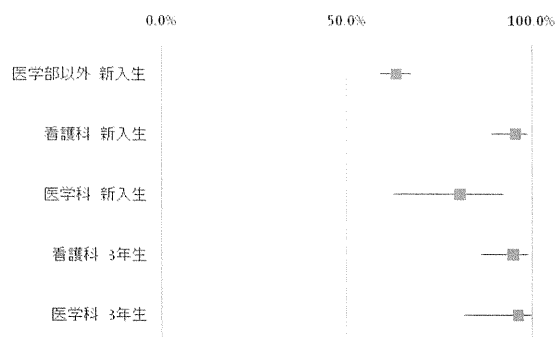
Q16. 性経験を持った後でも、  
HPV感染予防の効果が期待で  
きる

(正解: Yes)



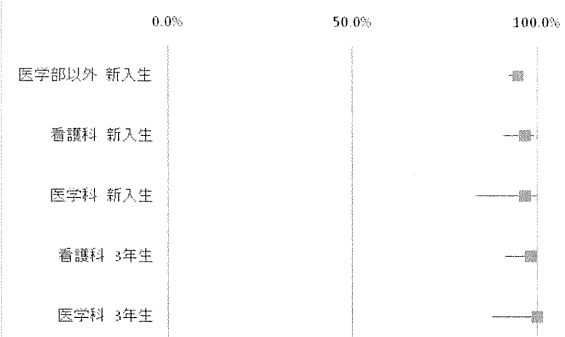
Q17. HPVワクチンは3回の  
接種が必要だ

(正解: Yes)



Q18. HPVワクチンさえ打った  
ら性行為で感染する病気の心配は  
ない

(正解: No)



Q20. 日本ではHPVワクチン接  
種の公費助成はまったく受けられ  
ない

(正解: No)

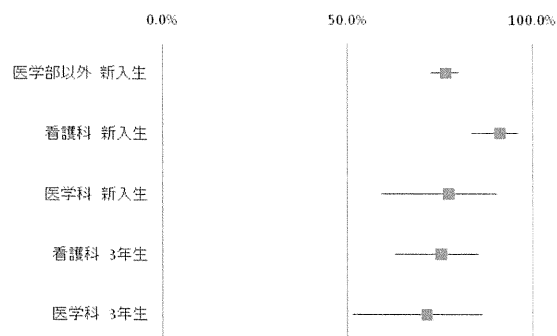




表4 HPVワクチンに関する知識 新入生と医学部3年生の比較検討

Q		正解率	95%信頼区間		有意差*
			下限値	上限値	
11	新入生	71.4%	67.7%	74.9%	あり
	医学部3年生	85.4%	76.3%	92.0%	
12	新入生	73.2%	69.5%	76.6%	なし
	医学部3年生	67.4%	56.7%	77.0%	
13	新入生	95.9%	94.0%	97.3%	なし
	医学部3年生	96.6%	90.5%	99.3%	
14	新入生	77.6%	74.2%	80.8%	あり
	医学部3年生	95.5%	88.9%	98.8%	
15	新入生	84.3%	81.2%	87.0%	なし
	医学部3年生	92.1%	84.5%	96.8%	
16	新入生	83.3%	80.2%	86.2%	なし
	医学部3年生	77.5%	67.4%	85.7%	
17	新入生	68.9%	65.1%	72.5%	あり
	医学部3年生	95.5%	88.9%	98.8%	
18	新入生	95.2%	93.3%	96.8%	なし
	医学部3年生	98.9%	93.9%	100.0%	
20	新入生	78.7%	75.3%	81.9%	なし
	医学部3年生	74.2%	63.8%	82.9%	

\*95%信頼区間が重ならない場合、統計学的に有意な差があると判定

#### 5. 子宮頸がん検診に関する知識

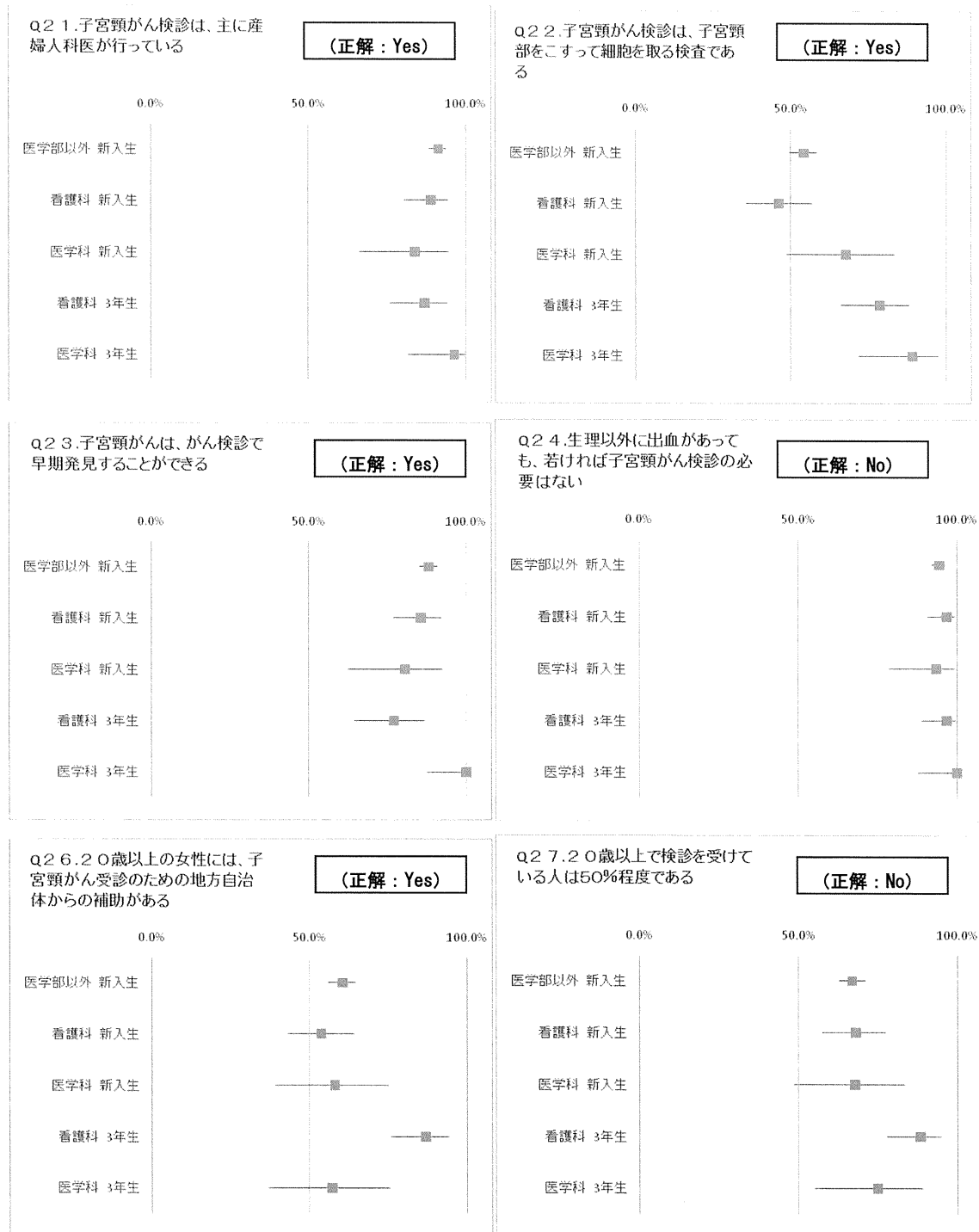
子宮頸がん検診に関する知識を問う設問10問（Q21～30）のうち、5番目の質問（Q25）を除き5群の正解率を図9に、新入生と医学部3年生の比較検討を表5に示す。

図9よりQ21「子宮頸がん検診は主に産婦人科医が行っている」、Q24「生理以外に出血があっても若ければ、子宮頸がん検診の必要はない」、Q28「子宮頸がん検診を受けていれば、がんにはならない」、Q29「HPVワクチンを受けていれば子宮頸がん検診の必要はない」の4問は、全体で正解率が高かった。新入生と医学部3年生

の比較では、Q22「子宮頸部をこすって細胞を取る検査である」、Q26「20歳以上の女性には、子宮頸がん受診のための地方自治体からの補助がある」、Q27「20歳以上で検診を受けている人は50%程度である」の3問で、医学部3年生が高かった。

5番目に質問としてあげたQ25「性交経験がない場合でも受けたほうがよい」は、無症候検診であれば性交経験以降でよいと考え×を正解として作成したが、がん検診と子宮頸部細胞診を同意ととらえた場合、出血などの症状があれば細胞診施行が望ましいので、これを不適切問題とした。

図9 子宮頸がん検診に関する知識（正解率と95%信頼区間）



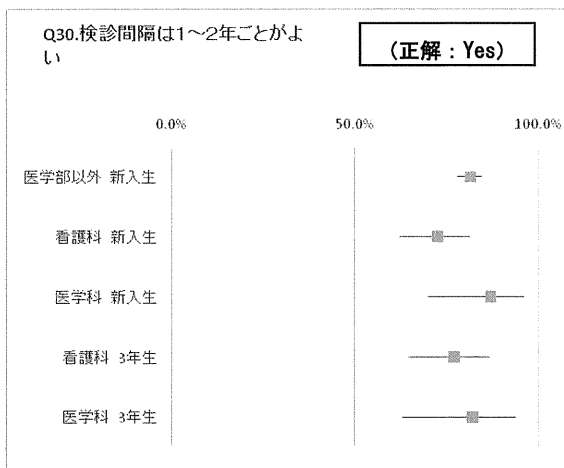
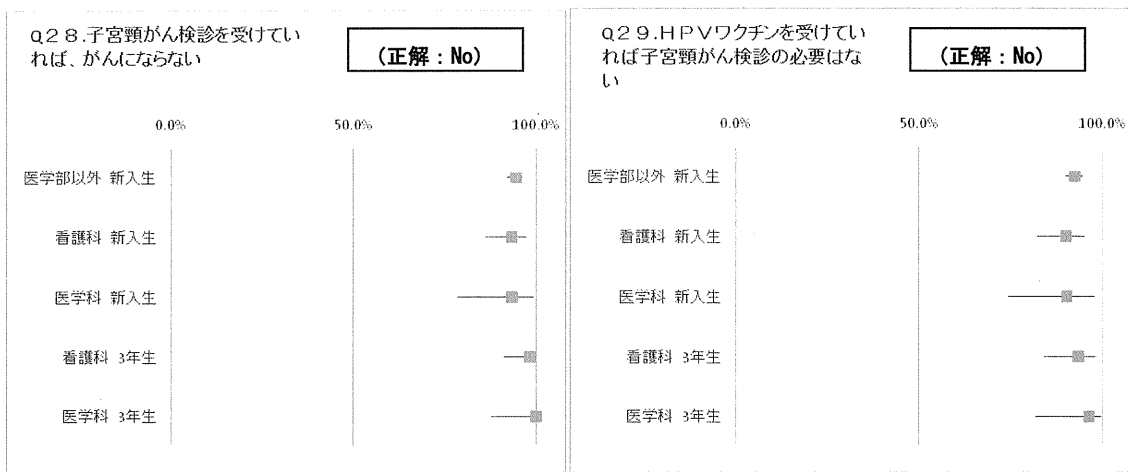


表5 子宮頸がん検診に関する知識 新入生と医学部3年生の比較検討

Q		正解率	95%信頼区間		有意差*
			下限値	上限値	
21	新入生	90.6%	88.1%	92.8%	なし
	医学部3年生	89.9%	81.7%	95.3%	
22	新入生	53.7%	49.7%	57.6%	あり
	医学部3年生	82.0%	72.5%	89.4%	
23	新入生	87.5%	84.6%	89.9%	なし
	医学部3年生	84.3%	75.0%	91.1%	
24	新入生	94.8%	92.7%	96.4%	なし
	医学部3年生	97.8%	92.1%	99.7%	
26	新入生	59.4%	55.4%	63.2%	あり
	医学部3年生	77.5%	67.4%	85.7%	
27	新入生	67.1%	63.3%	70.8%	あり
	医学部3年生	84.3%	75.0%	91.1%	
28	新入生	94.3%	92.2%	96.0%	なし
	医学部3年生	98.9%	93.9%	100.0%	
29	新入生	92.1%	89.7%	94.1%	なし
	医学部3年生	94.4%	87.4%	98.2%	
30	新入生	80.5%	77.2%	83.5%	なし
	医学部3年生	78.7%	68.7%	86.6%	

\*95%信頼区間が重ならない場合、統計学的に有意な差があると判定

## D. 考察

今回の調査対象である2011年の新入生および3年生は、2010年11月から行われている公費助成対象者でない学年である。

また、数年以内に各自治体での子宮頸がん検診の対象となる世代でもある。

新入生のHPVワクチンの認知度は49.5%、接種率は5.4%であり、低い現状がある。Q9「性経験がHPV感染に関係している」の正解率は医学部3年生と比べれば低い、72.2%と2/3以上が正解している。現在は高校3年生女子の性交経験率が半数前後とされている。本文中に記載を省略したが、将来的にワクチンを受けたいと回答している学生でも、まだ若いので今は必要ないと回答しているものもあることも含めて考慮すれば、子宮頸がん予防の知識はあるものの、各知識が有機的に繋がっておらず、ワクチン接種の行動へ結びつかない可能性が考えられた。

子宮がん検診については、新入生の場合、各自治体の検診対象年齢に届いていない学生がほとんどであるから受診率が低いことは当然であると考えられる。将来的に受診の希望のあるものも多い。しかし、検査の方法、自治体からの助成、日本の検診受診率の知識は医学部3年生に比べて低く、このことが、受診したくない理由として検査が怖い、時間がかかる、若いから必要ないが挙げられている要因と考えられた。

新入生に比べて医学部3年生の方が、子宮頸がん検診受診率が高い傾向にあることは、授業で子宮頸がん予防知識を講義することと共に、横浜市立大学附属病院で2010年1月から行っている院内職員・学生を対象とした子宮頸がん予防プロジェ

クトでの啓発活動の影響が考えられる。身近な施設でワクチン接種、検診受診が可能であるため、講義で知識を得たのち、受診行動に繋がりやすいと考えられた。

子宮頸がん予防推進のためには、十分な情報の提供と情報が有機的に繋がるような学習の場、知識を簡便に行動に移せるような社会的環境の整備が重要であると考えられた。

## E. 結論

子宮頸がん予防の知識と意識、HPVワクチンの接種率、子宮頸がん検診受診率を明らかにするために、大学新入生と医学部3年生の女子学生を対象に調査を行った。

新入生のHPVワクチン認知度は49.5%、接種率は5.4%と低かった。また、子宮頸がん検診の認知度は、78.9%と高いものの、子宮頸がん検診の方法や公費助成についての知識は充分浸透していなかった。

キャッチアップ接種対象者であり、あと数年で子宮頸がん検診の助成対象者となる10代から20代の女性に対して子宮頸がん予防の実践的な知識の普及は重要な課題であると考えられた。

## F. 健康危険情報

なし

## G. 研究発表

### 1. 論文発表

なし

### 2. 学会発表

なし

## H. 知的財産権の出願・登録状況

なし